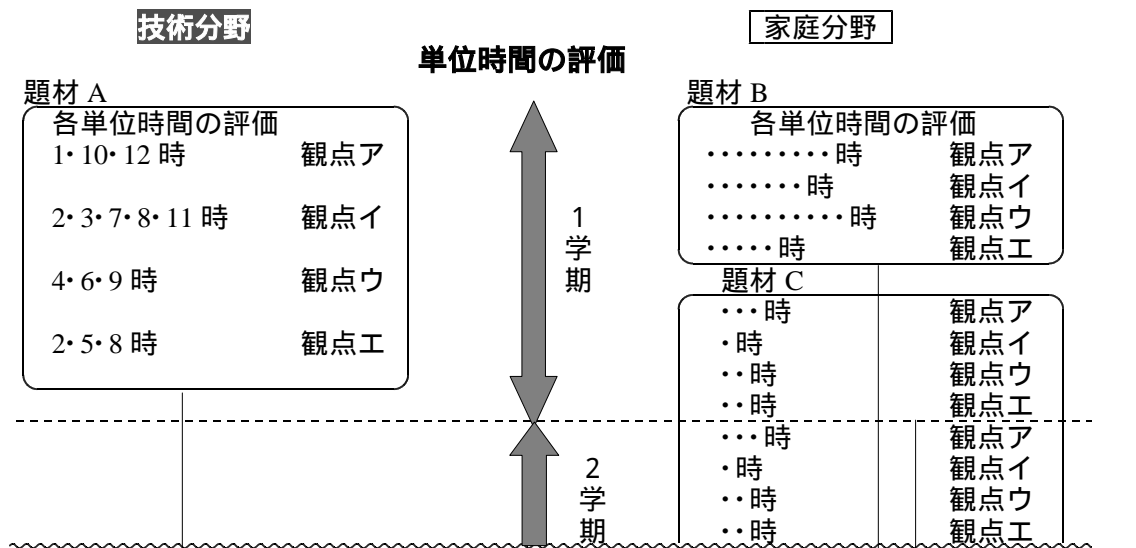


観点別学習状況の評価と評定への総括について

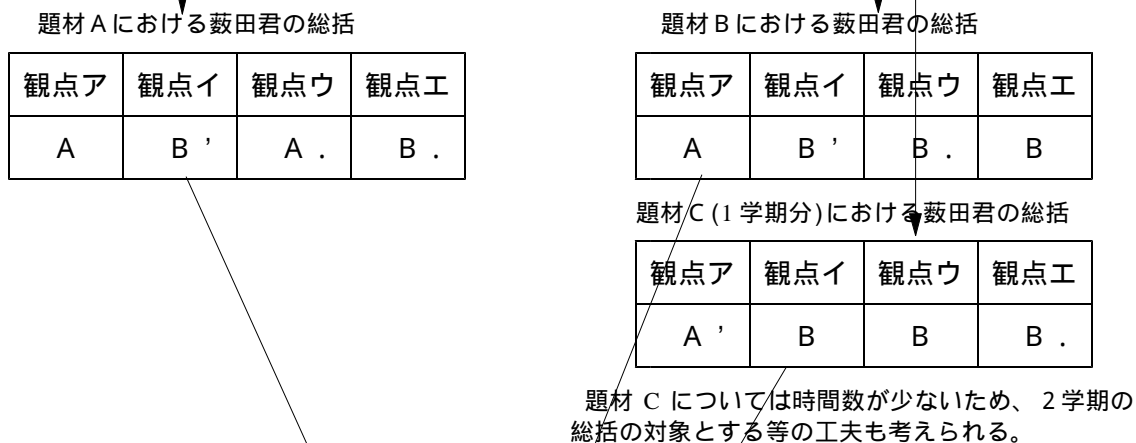
1 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括

(1) 「単位時間の評価」の記録をもとに、題材における「観点ごとの評価の総括」に導く



題材における「観点ごとの評価の総括」

単位時間的评价を各観点ごとに総括する。実際にはA B Cが混合した場合、総括に迷う場合が生ずる。下の藪田君の例のように、「Aに近いB」を「B'」、「かろうじてB」を「B.」というように総括する方法も考えられる。また、そうすることにより分野（学期末）の評価の総括をする際の参考になる。



(2) 題材における「観点ごとの評価の総括」から学期末における「観点ごとの評価の総括」に導く

技術分野 と **家庭分野** のそれぞれの「題材における観点ごとの評価の総括」をもとに導き出す。単純に記号から判断するのみならず、各題材の時間数や各観点の評価の回数、授業の様子等の交流をしながら各分野の担当が協議しながら行うことが求められる。

1 学期の藪田君の技術・家庭科の総括

観点ア	観点イ	観点ウ	観点工
A	B'	B	B.

通知票へは「'」や「.」を記載するとは限らない。評定への総括のために記録として残しておく等の工夫が考えられる。

2 観点別学習状況の評価から評定への総括

(1)学期末における「観点ごとの評価の総括」から学期末の「評定」に導く

評定への総括の考え方として、平成14年2月「国立教育政策研究所」が示した「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(中学校)」の第2章6には、次のように示されているので、参考にしたい。

中学校については「A, A, A, A」であれば「4」又は「5」、「B, B, B, B」であれば「3」、「C, C, C, C」であれば「2」又は「1」になる。

(ただし)

各観点ごとのA, B, Cが決まれば評定も必然的に決まるというものではないと考えられる。

例えば、同じ「A」「B」「C」という評価結果についても、それぞれの評価結果が示す実現状況には幅があり、このことが評定への総括に反映されることも想定されるからである。

また、評定についての基本的な考え方は次のとおりである。

「十分満足できる」と判断されるもののうち、特に程度の高いもの	5
「十分満足できる」と判断されるもの	4
「おおむね満足できる」と判断されるもの	3
「努力を要する」と判断されるもの	2
「一層努力を要する」と判断されるもの	1

これらのことをもとに、「観点ごとの評価の総括」を「評定」へと導いていく。藪田君の例では、「観点ア」は「十分満足できる」が、他の観点は「おおむね満足できる」状況である。また、「観点エ」はかろうじて「おおむね満足できる」状況と判断されている。従って、評定を「3」としてみなすのが妥当である。